伊勢物語、古注・伝本拾遺考

林　美朗

一

伊勢物語には多くの古注や伝本が残されており、最近、随分研究も進んで来た。しかし依然として未解明な部分や、見残しの部分もあるように思われる。本稿ではその中の「七本差別之事」と、古本系伝本その他につき、これまでの研究成果をも見渡しながら、私見を述べてみることにしたいと思う。

二

まず最初は「七本差別之事」についてである。最初の資料は、「七本差別之事」ということについて、冷泉家流の伊勢物語註所載の記事[1]を引用したものである。

伊勢物語註

抑、此物語に七本の差別有り。一には業平自筆の本。二には真平親王の本。三には安倍の総安の本。四には貫茂の内侍の本。五には高二位の尼の本。六には伊勢中書の本。七には長能がかりの後の本也。

一に、業平自筆の本は外題をかゝず。二に、真平親王の本には書書を加へたり。普通の本より殊多く物語多し。三に、宗倍朝臣の本はつゝ井筒の物語を始めかけり。四に、貫茂の内侍の本は高哲干朝の段無し。或本に云、貫茂の内侍の本は朝臣の本にいか程のかはりめなし。此は焼失の本也。焼残りたるに少々物を入たるなり。爾は芹河の行幸にて終たる也。五に、高二位の尼の本は、後尼は業平四代の孫此段聞これすの段也。是は家の本は焼失したりつるを後に書に写る所をかき集たる歟。哥も少く物語も少し。或本に云、高二位の尼は業平が自筆の本にすこし私の哥物語を入たり。六に、伊勢がきの本とは、業平伊勢を寮としたりし時、伊勢物語の草案をして書たりしを、業平滅後に字多院より召されければ書し、之段事を書たる事のあまた有りしを、かたはらいたがりて万葉の哥をぬきかへて十七段のかへ物とす。七に、長能がかりの後の本とは、伊勢斎宮の段を始に書り。是は後字に付て伊勢斎宮の事を始に書たりと云々。

又、業平自筆の本は、伊勢がきの本より後に業平此物語を作て、二男滋春に相伝す。定家相伝家なり。伊勢がき本は、家隆朝臣相伝家也。真平親王の本は、今六条家に所伝也。狩使の本は、すぎく殿の御時、長能朝臣を召て伊勢物語をせんさんして在原朝臣歌段の段書を作り大和神の験作の三巻の書を加てゝ[illegible]ために納給ふ。偽うる冠の本を盗賊の本と名付。此時長能朝臣紙本を批にひろめんが為にぬすみ出して、物語の段を作り詠をかへてかゝりの使の段を始書、狩使の本と名付て長家のたゝをとる也。哥も少く物語も少し。或本に云、今、紙屋の自筆の本、定家の本と成事如何。答て云、業平真名草書に三段阿古根尊の段に伝をくわへて伊勢物語を伝ふ。其より以来、業平孫右大弁元清の時に至て、すぐく殿より業平伊勢物語をめす。二巻の書を加へて御門に奉る。此時長能朝臣を召て、上に書所の書を加て、又巻の盗賊に被納つ。此時に長能の本再ひざうたる歟。七本の差別出来たる。此は自筆の本斗ひざうたるに依て、詠をかへて余の六巻の差別出来る也。其内に今の六本はうるかうよりの本たりといへども、自筆の本は盗賊の本となれり。さて、制刻殿の御時に至て、二条中納言としたゝに従盗賊を預け給ふ。是は長家より検出に至まで三代の間の御尋ねる歟也。爰然、二巻のひざうの書、彼悪不給つ。爰に業平七代の孫小山の三位たかはし見国、業平の家を伝たり。彼悪、此二巻の書を相伝せんが為に、見国を養子として此を授て嫡家とす。すぐく殿の時の書せきをゆゝる。此時見国、両書を彼悪に伝ふ。見国悪子故に、其家たへて、定家の家の物となれり。

と言っても、本稿ではこの伝承説の細部を具体的に検証することは、主眼とはしていない。このような中世における伝承説がどのように流布し、以下に述べるような資料に見られるようになったかという点について、私見を述べてみることにしたいと思うのである。

実はこの「七本差別之事」という伝承説は、次に掲げたような各種資料に見られており、上段のaからpとされた所は、かつて大津有一氏が、所載の資料として整理されたもの[2]である。これをその後の研究成果や発見をもとに整理・注記し直したものが、下段である。

この中、最初のaとしたものは、先に見たいわゆる冷泉家流の伊勢物語註そのものであり、片桐洋一氏の研究資料篇にも翻刻されている。が、同時にこれは、広島大学図書館蔵の千金莫伝や、最近、影印叢刊も刊行

a　宮内省図書寮蔵伊勢物語抄　片桐氏資料篇　↑　[十巻本・註(鉄心斎)]　千金莫伝（広島大）　奥秘抄（鉄心斎）
b　池田亀鑑氏蔵伊勢物語聞書（題簽）　肖聞抄？続群書類従所収？　→変容
c　同、伊勢物語聞書（内題）　所在・内容不明　→増補
d　宮内省図書寮蔵伊勢物語聞書（内題は肖聞抄）　文明9年本　→離脱
e　同、伊勢物語塗籠抄　静嘉堂・阿波文庫旧蔵　＝正応四年奥書[註(冷泉家流)]（河野美術館蔵）
f　無窮会蔵伊勢物語新考
g　闕疑抄初冠　海量（[illegible]門下）
h　前田侯爵家蔵伊勢物語　加藤盤斎
i　宮内省図書寮蔵伊勢物語（内題は[illegible]）　＝伝正徳本・北大本（正徳本？）、河野記念館本・学習院三条西家本（常縁本？）　＝武田本
j　同、伊勢物語抄（内題に[illegible]）
k　同、伊勢物語注見聞書上巻抄　冷泉か二条庶流の偽書
l　池田亀鑑氏蔵伊勢物語聞書（題簽）　詳細不明
m　同、伊語首抄　文明9年本肖聞抄を書入れ
n　内閣文庫蔵惟清抄

されている、鉄心斎文庫蔵の十巻本伊勢物語註や奥秘抄などを基に成ったとされているものである。以下bからpまで、通覧すると、肖聞抄や宗祇・闕疑抄などの名が散見されるが、eの塗籠抄と言うのは、宮内庁書陵部・静嘉堂文庫・阿波文庫旧蔵本という三本ああるが、大津氏の昔から本態は冷泉家流の伊勢物語註とされており、正応四年の奥書を持った、最近佐藤裕子氏により翻刻・紹介もされた、河野美術館蔵の冷泉家

流伊勢物語註[3]に淵源するようである。つまり冷泉家流の伊勢物語註は、この正応四年の奥書を持った、佐藤裕子氏により翻刻・紹介もされた塗籠抄こと河野美術館蔵の冷泉家流伊勢物語註が変容・増補・踏襲されて、宮内庁書陵部蔵本に見る如き形になったものである。

次にhの前田侯爵家蔵とあるのは、尊経閣文庫蔵の伝正韻本がこれに当たり、普通の勢語伝本であるが、実はこれと同じようなものに北大図書館蔵本・河野記念館本・学習院大学三条西家本がある。ともに武田本系統の伝本であり、前二者は正徹本の系統、後二者が常縁本の系統のものとされている。

kの伊勢物語注見聞書上巻抄は、最近日本古典偽書叢刊にも収載されて、山本登朗氏に翻刻もなされているが、大津氏によれば、冷泉か二条庶流の偽書とされているものである[4]。残りは後世の末流書の類が主のようである。

なおこの他、慶応本伊勢物語註[5]にも七本差別の記事が存している。それによれば、その七本は「皆是業平自筆ノ本ヨリ出タリ」とされている。

さて、このように見て来ると、七本差別之事なる伝承説は、或いは冷泉家流伊勢物語註から直接出たものかと推察され、それが東常縁・宗祇・肖柏・三条西家・幽齋ら、或いは正徹などに伝わったものではなかったかと思われる。そして、であるからこそ、七本差別之事の伝承説が肖聞抄や宗祇・闕疑抄などの書にも散見されているのであり、正徹本・常縁本の系統の武田本系伝本にも一部見られているのではないか、と思われるのである。

次の表は、福井貞助氏が記述内容まとめて一覧表にされたもの[6]に、手を入れたものである。ここでも、細かく各々の真偽の程などを検討することはしないが、表中の数箇所のみ、一言しておくことにしたいと思う。

すなわちまず、段数・歌数では、一つの本に多いか少ないかなど、全く正反対の特徴が記載されているのが特筆される。又伝流で（　）を付したものは、はっきりそれとは明記されていないものである。又業平自筆本の芹川行幸章段以下書継ぎや賀茂内侍本の芹川行幸段欠、長能狩使本の大明神御作の段の後補は、通例の広本系諸本で114段以降を欠いていることとも関連するかとも思われ、具平親王本や賀茂内侍本は、大略（安倍）帥安本とされているものである。更に業平自筆本や長能狩使本は、初冠本や狩使本が混同されてが塗籠之本というものであり、特にこの異称に関しては、業平自筆本・狩使本・初冠本の塗籠本といった、以前の三本説が基になっているように思われるものである。

伝本／事項		段数	歌数	形態	成立過程	伝流	異称
(1)	業平自筆本	中書本に自作物語付加		外題なし	芹川行幸段以下遊春書継ぎ	定家	狩使本一本
(2)	具平親王本	多	多 少	阿潘か浦の歌入る 大略師安本	裏書を表に書加う 業平の裏書を表に書加う	具平親王 六条家	塗籠之本
(3)	安倍師安本	少 多（清行本）		筒井筒段を冒頭とす	次第を調える	安倍師安	
(4)	賀茂内侍本	多		西国下向段に書通になき四首有 斎宮下校段欠 最後芹川行幸段	焼失したものに少々物を書き入れる	賀茂内侍 大略師安本	
(5)	高二位尼本	少			焼失の本後に暗に覚える所ばかり書く業平自筆本に少々私の歌物語を入れる次第を調える	高二位尼	
(6)	伊勢中書本				秘事又は我事書きたる段につき万葉の歌をぬきかえてかえ物とす	伊勢御 宇多院 兼隆	中書本
(7)	長能狩使本			斎宮段を冒頭とす	大明神御作の段を後に加う 長能道済段序を乱し体をかえ斎宮段を冒頭とす	朱雀院 長能 道済	初冠本＝塗籠之本

いずれにせよこの七本差別之事は、混乱しているにせよ、以前の三本説が基になっており、又それは冷泉家流伊勢物語註から直接出で、東常縁・宗祇・肖柏・三条西家・幽齋・正徹らの注釈書や伝本に伝わったと考えられることを指摘しておきたい。また福井氏が提起しておられまる「定家本が流布した時代に、なぜこの様なことごとしい異本説が栄えたかということ」に関しては、福井氏自らが既に解答を与えておられる、「三本説とは要するに、並列して遡及しえない対立本の称ではなく、古形より転化の各段階に生じた特徴的な三本をさすのである。七本説はこれに同

様な性格の本、又はこれらより転化した本を加えたものである。これらは近代における現存本文を批判して分類をなすといったものとは余程趣を異にし、成立論書名作者説と重なり合って生じた説なのであった」とされている点で大体尽きているように思われる。これに更に付け加えるならば、それは伊勢物語の話の各々に、当否は別にしても、実在の人物名や年代を当てるという、冷泉家流伊勢物語註の方法やあり方に、ある意味で通底しているものではなかったかとも思われる。すなわち「流布本に対立させて一異本を注視する事は、更に一異本を、又次々と異本を提示する方向をとる様になるであろう。注釈の流行は同時に異本の重視に連なる」とされている如くである。

三

次に本稿の主眼の第二点目は、古本系諸本にまつわる事柄についてである。ここで問題にしたいと思うのは、古本系諸本の或る少数の伝本に、49段の本文に関し、次に掲出するような「妹のいとおかしげなる□を見て」の部分に関し、小異ある異文が見られることについてである。すなわち最福寺本で「きんをしらべけるを」、時頼本・伝後醍醐天皇　翰本・伝二条為明本で「きむをしらふとて」、専修大学寂身本と伝為相本で「一本ニきんをしらふとて　可用琴説」となっている。

さい五かものかたりをかきていもうとにきむをしへたる所の人のむすはん…
（源語・総角、大成異同ナシ）

最福寺本　時頼・後醍醐天皇・二条為明本　寂身・為相本　一本ニきんをしらふとて　可用琴説
きんをしらべけるを　きむをしらふとて　一本ニきんをしふとて可用琴説
註・冷泉家流（河野美術館・書陵部）　塗籠抄（書陵部）
知顕集（鉄心斎）　琴をしらぶ
きんをしらべ
伊勢物語箋（鉄心斎）きんひきけるを（鎌田正憲『考證伊勢物語詳解』に注）知

もちろんこれは、源氏物語総角巻の記述と関係のあると思われる記載であるが、源語本文は「さい五かものかたりをかきていもうとにきむをしへたる所の人のむすはん」で、大成に異同はない。

これは、従来からも注目されてきた事実であるが、実はそれがその次に掲げたように、冷泉家流の伊勢物語註にも同様に見られている。「をしらふ」「をしふ」「をしらべ」と、きわめて誤写しやすいところではあり、「しらふ（べ）」の方が優勢であるようであるが、どちらが先後と決しがたいところではあるが、河野美術館蔵の伊勢物語註を始め、全て確認したわけではないが、鉄心斎文庫蔵の知顕集も含めて多くの類書に同様に見られている。

最福寺本を始めとするそれらの諸本は、片桐洋一氏によれば、いわゆる別本とされており、山田清市氏によれば、この部分のそれらの異文は、通行本の本文に後から付加されたものとされている[7]。冷泉家流伊勢物語註が拠った勢語本文が、一体いかなるものであったのかは判然としないが、いずれそのような本文を持ったものに注記を施したのではあったわけではあろう。が、この事実を一体どう考えたらよいであろうか。

この中、天理図書館伝為相本は、最近、加藤洋介氏により、実は建仁二年定家書写本とされるものである[8]が、専修大学寂身本もほぼ同様であり、かつこれも建仁二年定家書写の系統の一本である。その「一本」とは、それを本文として有している最福寺・時頼・伝後醍醐天皇宸翰・伝二条為明本や、諸注釈書の本文を指しているのであろう。そういう伝本が確かに存在したということではある。

建仁二年定家書写本は、伝為相本の方が原形であろう。また（冷泉家流）諸注釈書の本文は、おおむね片桐洋一氏のいわゆる別本に近いようである。

49段のこれら源語にまつわる異文は、或いは建仁二年定家書写本に端を発した（冷泉家流）諸注釈書の本文を巻き込んだものではなかったであろうか。或いは冷泉家流伊勢物語註そのものも、そのような源語にまつわる注記を加えたのではなかったでありろうか。

時頼本も、先に掲げた諸伝本の中では古い、具平相伝本と朱書されているものであり、かつ定家本と校合された片仮名交り本である。具平親王（相伝）本は、先の七本差別之事の伝承で見ると、裏書（注記）が表に書き加えられたものとされており、それが源氏物語でも冷泉家流伊勢物語註でもあったということも考えられる。先の福井貞助氏は、むしろ具平相伝本と朱書されていることが一因となって、七本差別の具平親王本が案出されたのでは、との想定に傾いてもおられるが、いずれにせよ、複雑なそれらの生成には、建仁二年定家書写本や冷泉家流伊勢物語註が深く関わっていたのではないか、と思われるのである。

四

本稿では伊勢物語の「七本差別之事」と、古本系伝本その他につき、これまでの研究成果をも見渡しながら、私見を述べてきた。

更なる検討も必要と思われるが、一応これにて擱筆することにしたい。

注

(1) 片桐洋一『伊勢物語の研究（資料編）』明治書院、昭和44

(2) 大津有一「伊勢物語―定家本の展望―」（岩波講座日本文学古代Ⅲ所収、昭和6）

(3) 佐藤裕子「河野美術館蔵『伊勢物語註　冷泉流』（解題・翻刻）」（片桐洋一編『王朝文学の本質よ変容　散文編』〈和泉書院、平成13〉所収）

(4) 大津有一『伊勢物語古註釈の研究　増訂版』八木書店、昭和61

(5) 長尾一雄「定家流　伊勢物語註」（『国文学論叢3平安文学　研究と資料』所収、昭和34）

(6) 福井貞助『伊勢物語生成論』有精堂、昭和40

(7) 山田清市『伊勢物語校本と研究』桜楓社、昭和52

(8) 加藤洋介「建仁二年定家本伊勢物語の復元」中古文学第79号、平成19年6月